

地域活性化・地域福祉と郷土愛に関するフィールドワーク

— 徳島県神山町に於る継続研究 —

Fieldwork in the Community

— The Activation of Community, Community Welfare and Love of Their Home Province —

渡辺 牧*

Osamu Watanabe

I. はじめに

多年、各地で地域研究のフィールドワークに携わり、また初期シカゴ学派を牽引した R.E. パークの野外調査重視の生き方などに共感する中で、フィールドワークの手法を社会学教育で伝えるため試行錯誤を重ねてきた⁽¹⁾。フィールドワークは教科書やマニュアルを読んだり、授業を受けただけでは熟達は無理で、現場での経験の積み重ね（インフォーマントとの相互誤解など無数の失敗を筆者も重ね、そうした人間臭い体験から学んできたと思う）により手法が身についてくる⁽²⁾。

こうした問題関心から、本研究は、①四国の過疎山村をフィールドとした地域活性化、地域福祉に関する調査研究と、②社会研究の手法としてのフィールドワークの可能性に関する考察という2重の目的で進めた。

①に関しては、過疎山村のフィールドワークを通じて、地域実態、地域活性化に取り組む人々の生き方を跡づけ、さらに地域に根差した高齢者福祉事業と児童福祉施策の実態と課題に関して考察する。実態調査と切り結びながら、②に関し問題提起を図りたい。

地域ぐるみでの子育て支援、個々人の生き甲斐、自然などを楽しむゆとりある時間の確保、

心豊かな高齢期など生活の質的充足へのニーズが高まる中、地域研究への視点刷新が問われている⁽³⁾。そこでは第1に地域的個性（ローカリティー）の現代的再生が、第2には郷土もしくは生活の拠点とする地域への愛着の在り方が問題と思われる。郷土愛、地域への愛着なしに、まちづくり、地域福祉充実は進み得ないからである。本稿では、郷土を生誕の地だけでなく、現在の生活の拠点の町を含めた広義の意味でとらえている。

今日、経済成長を絶対目標としないで豊かさが実現可能な「定常型社会」、持続可能な福祉社会の在り方が問われつつある。こうした時代変化の中、従来は地域活性化の尺度として、地域産業の成長、消費市場の発展、地域情報化など地域インフラ整備が重視されてきたが、これらの分析と共に、今後は住民参加型の地域活性化運動、福祉のまちづくり、コミュニティ構築などの住民レベルでの「主体」形成が重要であろう。調査で主体形成の手がかりを探る時に有効なのが、参与観察などのフィールドワークの手法である。

農山漁村の過疎化の特徴は、人口・戸数減少、農林漁業の衰退と生活環境の悪化、さらに集落解体の危機に至ると説明されよう。これは地域を外から客観視するマクロ（巨視的）の状況で

*基礎教養課程

義である。しかし多年、農山村の生活現場を訪ねる中、村おこしと自分たちの暮らしを一体化し地域活性化に懸命に取り組む住民の活動、彼らの意気の高さにふれた。「自然と人情味、地域文化という資源を生かして地域振興を進める」というスタンスは、生活現場のミクロ（微視的）からの状況定義である。社会調査による実態解明は、マクロな構造分析によるいわば鳥瞰図の作成と、社会を動かす主体形成に着眼のミクロ分析—虫の目に通ずるフィールドワーカーの双方が大切である。1人1人の個々人の状況定義が集積して、社会を動かしていく。C. W. ミルズが社会科学の使命について、「自らをその時代に位置づけることで、自己の経験を理解し運命を推し量り、自他の生活機会に気づくこと」と述べ、個人の特殊状況での経験（生活史から生まれる私的問題）と構造的な公的問題の複眼的把握を勧めたことは示唆に富もう。

II. 生きた小宇宙の継続的な定点調査

地域とは生きた有機的な小宇宙であろう。

人口が急減の過疎山村は表面的に一見すると、静まり返った変化に乏しい地域に映るが、町おこし運動に視点を移動させるとダイナミックス（地域変化の力動感）が垣間見られてくる。地域の実態分析は静止状態の「今」をとらえるのではなく、過去から現在への変動を観察、記録し問題発見することから始まる。

その意味では様々な地域の比較研究も大切だが、一地域に腰を据えての継続的な定点調査が有効であり、本研究はその手法に基づく。

対象地の徳島県神山町は、吉野川の支流、鮎食川流域沿いに南北10km、東西20kmの広がり町で、徳島市に接する広野から、鬼籠野、神領、もっとも奥地の上分地域まで五地域から構成されている。筆者は1980年代から同町で、地域おこしと地域情報に関するフィールドワークを続ける中、I.Y はじめ地域活性化に挑む人々と親交を重ね、彼らは重要なインフォーマントとなっている。

十数年前に出会ったときと今年の再訪時とを比較し、かれの「ふるさとづくりは自分にできることから」「過疎山村の自然という地域色を徹底的に生かす」「地域の内外との開かれた人間関係＝草の根ネットワークを育てる」状況定義は不変だった。

一方、変化したことも多い。1972年に23歳でシャクナゲの里キャンプ場開設を志向してたった一人で道路造成などに取り組んだ数年間は、保守的風土の町民からドンキホーテ扱いを受け笑い者にされた。しかし地道な努力が少しずつ実り、キャンプ場の事業が軌道に乗ると周囲の評価も一転、彼は現在、町観光協会会長の大役を担っている。この10数年間で、彼は自分のキャンプ場事業だけでなく、町全体の商工観光振興へと視野が大きく広がった。彼は現在51歳。再訪して、彼は町おこしと一体化したこれまでの豊かで変化に富む人生経験から、後述するように戦略的発想力も培ってきたことに気づいた。

III. 共同作業としてのフィールド・ノート

フィールドワークは、人々が働き憩う生活の現場に入り、彼らの話に耳を傾け、わからない点を丹念に質問し教示していただく作業の積み重ねである。「研究目的は大義名分にはなりえず、相手に貴重な時間をさいて教えを乞うているという謙虚な気持が大切」（福田アジオ）なのである。

調査研究者にとっては、記録を綴るフィールド・ノート、現地で撮影した写真、聞き取りの録音テープなどが、現地報告の大切な資料となる。ノートは調査者とインフォーマントとの共同作業の産物である。

以下では、2種類のフィールド・ノートの特徴にふれたい。第1は2001年秋に徳島県神山町で調査した際の私的なフィールド・ノート（調査者が現地で肌で感じ取った思いの記録という意味で、以下「内的フィールドノート」と呼ぼう）である。このノートは、滞在中、昼間

のフィールドワークについて、宿舎で夜に毎日綴った。私的なノートには、調査者の心情が記録されている。

第2は日中の聞き取りのノート（これも作成した。こちらは「インタビュー・ノート」と呼ぼう）である。これはインフォーマントからの聞き取りの客観的記録である。

フィールドワークとは、現場に身を置き、調査者が自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じた体験をもととした一次資料がもっとも大切で、「誰かが集めたデータをもととした二次資料とは質が異質」（佐藤郁哉）なのである。

IV. 徳島県の過疎化の実態

IV-1. 人口変動

国勢調査により、県内の過疎化の実態を見たい。1960年から1995年までの人口減少率で、木屋平村が6164人から1505人に減少、増減率は-75.6%で、県内でもっとも減少率が高い。次いで一字村が-75.3%、東祖谷山村が-66.3%となっている。神山町は19441人から9487人に減少、減少率は-51.2%である。減少率が50%以上の地域は、地形が急峻な剣山系に集中している。これに対し、人口が大幅に増加したのは県都の徳島市で、20万3326人から26万8706人に増え、+32.2%である。

IV-2. 移り行く山村の変容と郷土愛 ー神山町上分地区

筆者は1988年と1991年に同町で調査を実施したが、それ以降、高齢化率が高まり、65歳以上の高齢者率は38.2%（2001年3月）である。フィールドワークを行った上分地区は1955年には3500人だった人口が870人まで減少した。1881年創立の上分小学校は、児童数が1959年の613人をピークに減少し、1999年には各学年1-5人の計17人に減り、児童数回復が見込めずに同年度で休校した。休校の背景には、運動会などの学校行事開催も困難になったことがある。このため、2000年春から児童は8キ

ロ離れた神領小学校へ町営マイクロバスで通学している。上分中学は1992年に休校した。

産業面では山林を生かし、杉、檜、松ら林業が盛んだったが、木材の価格低迷により、現在はすだち、ゆずらの果樹生産、野菜、茶、植木栽培と梅干、木炭生産、観光が主産業である。町内にはホテル2、旅館4軒、キャンプ場が5つ、四国霊場札所の宿坊が1つある。

こうした中、過疎を逆手に郷土愛に根差す地域活性化への地道な取組が目される。上分地区では2001年7月の七夕を前に、国道438号沿いの全住宅、商店の120戸が、願い事を書いた短冊をつるした七夕飾りを家々の前につるし、当日は夜9時まで玄関の明かりをつけ、にぎやかな雰囲気を出した。翌日夜には、休校中の中学グラウンドで七夕飾りを燃やし、住民が七夕願い事の集いを開いた。呼びかけたのは、町の地域おこし団体・上分地区チャレンジ協議会で、夏のつかの間だけでもにぎわいを取り戻すのが狙いであった。

同会は6月にも、「地元の北谷川にホタルが大量発生」との新聞報道で、見物客が連日、700人、1000人と訪ねた際、接待所を臨時に設け、飴湯でもてなした。会員で木工作家のS.Mさんは、夜道を照らすぼんぼりを多数作って提供した。

2000年3月と8月には、上分中学をアトリエとして活用、芸術を仲立ちに地域活性化をめざす造形ワークショップ「カミヤマート2000」が開かれた。休校中の中学に子供の歓声が響き、指導に来た美術大学の学生ら67人が民泊して住民と交流。町内外の家族連れらも多数訪ねた。地元の多数のお年寄りや若者との交流を喜び、都会暮らしの学生たちも美しい自然と民泊家庭のもてなしに心を打たれた。

同郷会も関西、関東に設立され、関東神山会は2000年に郷里にハナミズキを植樹したり、町特産品の購入や紹介などふるさととの絆を深めてきた。

V. 世代を越えた地域活性化の担い手論

V-1. 自然豊かな山村と都市交流めざすI.Yの事例

I.Yの町おこしめざす生き方に関して、筆者はかつての調査研究で次のように総括を試みた(渡辺[1992])。

①自営のキャンプ場「岳人の森」で、栽培困難な高山植物のシャクナゲを10数年かけて育てるなど、山村の自然を生かす長期的視点から、都市との交流をめざしてきた。

②彼の町おこしへの志向性の理解者、支援者の輪を一步一步広げている。

③過疎山村の活性化には人の往来が何より大切との基本認識を青年期に確立した。

④地域活性化への挑戦には終わりがなく、それと一体化した人生観を大切にしている。

現況を見よう。この10年間で、彼はキャンプ場経営の事業基盤、ネットワークを地道に固めるとともに、山村観光の在り方への視野を大きく広げた。妻と2人でキャンプ場を始めたとき27歳だった彼は現在52歳となり、地域活性化のリーダーとして活動している。

①に関しては、キャンプ場のシャクナゲの本数は1500本と変化はないが、25年前に植え始めたナツツバキは1000本と倍増した。最大のイベントにして収入源である5月のシャクナゲ祭の入場客数は、1991年の4000人から2割ほど増加している。収益は入場料、食堂での特産の蕎麦などの料理提供、木工製品、銘菓などの土産、記念品販売による。祭開催の際、最初は受付、炊事担当など20人もの協力者を雇用し、今は10人ほどを雇用、臨時の仕事ではあるが、地元の雇用対策にも貢献している。

同キャンプ場の経営が成功した要因は、入場客に喜ばれる花の栽培に力を入れてきたことである。3月末にはマンサク、4月はカタクリ、5月はアケボノツツジ、シャクナゲ、6月はヒコサシヒメジャラ、7月はナツツバキ、8月はナシ、9月はトリカブトが開花する。

彼は「今後、キャンプ場に季節ごとにさらに

魅力的な花を咲かせたい」と考え、奈良県が群生地のおオヤマレンゲ栽培も志向、苗を麓で育成している。

②では、1987年の町観光協会設立以来、観光振興に貢献し、3年前、会長の要職に就き、会員100人のまとめ役を務めている。他地域の町おこし活動家との交流にも熱心である。県職員や地域づくりの民間団体との非公式の場でも、「地元固有の自然と味覚と歴史性を大切にした地域の個性重視型の活性化」を訴え続け、輪を広げてきた。事業経営者として収益を軽視している訳ではないが、経済利益と町おこしという公共的使命を複眼でとらえ続けている。

③では、鮎食川上流の30mの落差をもつ溪谷美の神通滝で、凍結する滝鑑賞ツアーを提案、2001年2月に実施した。狭い山道のため安全に案内するスタッフ確保の問題もあり、最初の定員は20人だったが、地元新聞の報道により申し込みは300人を越した。緊急役員会が開かれ、抽選で参加者決定となり、徳島市からは2台のマイクロバスに各25人が鑑賞に訪ねた。

参加費は大人4500円(子供3500円)で、バス代、昼食代、町の神山温泉の入浴代、記念写真代金が含まれていた。I.Yは「つららに覆われた滝の鑑賞ツアーなど、ふだんできない観光体験の機会を作れば、観光客は増えることが立証された」という。

彼は、神山町に山岳をはさみ接する上勝町の第3セクター、月ヶ谷温泉から岳人の森キャンプ場近くの高山植物を鑑賞するバスツアーを2000年から受け入れ開始し、2年目には10数回実施できた。

④に関しては、新しい事業への挑戦を続けている。1997年、キャンプ場にある鉄筋コンクリート平屋の山小屋を、2階建ての宿泊棟に改築した(延べ260平方m)。1階には宿泊用の個室、バーベキューを楽しめる土間、石清水を引いた洗い場、トイレ、風呂を設けた。2000年から、高松空港のヘリコプター会社と提携し、10月に紅葉と山岳風景を楽しむ遊覧ヘリコプターをキャンプ場から発着させる事業も始め、

200 人の利用客があった。

2000 年 12 月から、神山町と木沢村の境にある標高 1357m の砥石権現へ、初心者が彼のキャンプ場から登れる登山道の整備を始めた。同所へは木沢村側の剣山スーパー林道からの登山道があるが、傾斜が急で高齢者らには敬遠されていた。登山者の利便性とキャンプ場の魅力が高まると考えた。作業は、キャンプ場上の急峻な傾斜地に、じぐざぐに迂回路を取り付ける難工事である。

V-2. 過疎山村で植物園運営に挑む

M 夫妻の生き方

1993 年に上分地区に植物園を開いた夫妻の生き方を跡付けたい。夫の S.M さん（以下 S と略記）は 87 歳、妻の K.M さん（K と略記）は 84 歳。植物園は、高度 300m、傾斜地の元水田（棚田）及び山林だった地の約 2ha に開かれ無料開放されている。高温多湿で北斜面、地質が良く地下水にもミネラルが豊富に含有されているため、自生植物が豊富な地である。

園内の植物は 730 種に達し、うち薬草が 280 種も育っている。高さ 40m のメタセコイアの巨樹は植物栽培に最適な地であることを物語っている。樹木、草本類の多くに名札が付けられ、薬草には効能も記されている。白トタンを四角に切り、竹の柄を付けた工夫の名札である。4 月に開花する落葉灌木のレンギョウは千株以上植えられている。

夫妻が園を始めた目的は、次の点による。

① S さんの生まれ故郷の豊かな自生植物を核に、他地域の植物も植栽して後世に残したい。神山町には多種の自然林が自生していたが、戦後の植林ブームで大半が杉、檜に代わり、その日陰のために野草が育たず、植物の種類が大幅に減ったことを危惧したのである。

植物園の魅力が高まり来園者が増えれば、過疎が進む上分地区の交流人口が増え地元活性化の一助にもつながる。

② S さんは多年、小学校教諭、校長、大学教員を務め、退職後、夫妻は郷里（妻は徳島市出

身）で、スダチとユズの果樹園経営にいそしんだ。だが高齢となり、農作業が年々重荷となる中、じり貧となるのはつまらないと考え、新たな生き甲斐を植物園に見出した。

③ 無料開放から察することができるように、同園は営利目的ではなくボランティア精神で運営されている。自治体が開設する植物園は多額の経費を要する。が、夫妻で力を合わせれば、多額の経費をかけなくても魅力ある園にできると考えた。1996 年には「M 園子ども会」が発足、児童生徒が植物に親しみ興味を喚起するため植物観察会を開催している。

教員出身で児童教育に情熱を傾けてきた S は「植物を愛する子どもたちを育てたい」と念じた。

人々に愛される植物園をと、エントランスには、園の説明文、児童の植物観察会の写真を引き伸ばしたものも掲出されている。地元大学の研究者を講師に招いての観察会は好評である。園子ども会の観察会は 2001 年夏までに 11 回開催。ただ過疎が進み、地元で児童が少なくなり、児童参加者募集に苦心している。

このボランティア事業が高い評価を受けた要因を挙げよう。第 1 は、S さんと植物研究との関わりが青年期に始まり、植物分類の知識が豊かだった。彼は小学校教諭となり郷里の学校に赴任した 1934 年から、自生する植物 898 種を調査した。1937 年から理科の教諭らと県下の山野を歩き植物研究に励んだ。その後、勤務先の学校で植物園を造るなど自然教育に力を傾けた。地元では「過疎山村に於る植物の学術的観察のスポット」という評価も耳にした。地域振興にとって草の根からの学術の拠点は大切であろう。

第 2 は地元の自然条件、山野に精通した生まれ故郷での挑戦だったことも有利に作用した。傾斜地の特性を生かして、花や果実を眼前に、樹木全体が観察可能に工夫をこらしている。

第 3 は、園スタート以降、地元の植物、薬草研究者、同好の人々から、植物分類や薬草の薬効の教えを受けられたこと、植物の寄贈を受け

た。理解者、支援者の輪を広げる努力を続けたことは重要である。

第4は、ボランティア事業で重要な、利用者のニーズ対応策である。Sさんは児童教育に打ち込んだ生活史から、地元の児童を招いての観察会を続けている。山村の児童にとって、植物分類がされ名札が付けられた園との出会いは心弾む原体験だった。大自然の中で暮らしているからといって、自然のメカニズムは住民にとり理解されているとは限らない。植物や昆虫、魚類などの分類、生態研究は、自然保護に通じている。彼は「植物研究者はともかく、一般の人々には美しくないと興味が出ない。名所の要素を取り入れることも大切」と、レンギョウなど美しい花を咲かせる特定の花の株を集中的に増やすことに努めてきた。ボランティアは、自己の人生の意味の充実を求めることと、人々のニーズ対応型の社会貢献がセット化の活動としたら、ひとりよがりの独善では継続困難であろう。植物を愛する人の裾野を広げることが重要なのである。

V-3. 郷里の山村発の手作り工芸の挑戦と愛郷意識

2000年4月に上分地区に、木工作家ら5人（現在の出展作家は8人）が中心になり、神山工芸村が開設された。展示販売されているのは、地元で創作された漆を塗った木工品、木地のまま天然の木の持ち味を生かした腰掛けなどのクラフト、陶芸作品などが展示販売されている。木工、陶芸などの地元作家はいても、町内には作品を展示、販売するギャラリーが少なかったことが、工芸村創設の背景にある。作家たちは40代から70代までおり、女性3人、男性5人で平均年齢は50歳。

工芸村の展示販売スペースは木造平屋、30平方mと決して広くないが、山村発の心温もる作品ディスプレイは好評である。販売価格も、手作りの木工の木の年輪が幻想的な一輪挿しが4000円と、良心的である。

Mさん（54歳）は上分に生まれ、徳島市で

独学で木工技術を習得し、帰郷し創作に入った。作品は首都圏などに卸していたため、神山町では知られていなかった。卸業者との取引が不安定で、注文が減少したこともあり、上分入手の自宅隣りに店を出し、さらに工芸村を開いた。妻はパッチワークを創作しつつ、工芸村の店に通い販売を担当。彼は、郷里にふんだんにある樹木という資源を、木工技術によりアートとしての付加価値を付けることに打ち込んできた。

これまで破棄されてきたケヤキの枝を材料に、輪切り状の美しい茶たく、木の年輪を透かして見せる一輪挿しなどを創作している。

「ケヤキの枝は割れやすいので技術がいる。年輪は木の命。天候がいいと年輪が狭まり、雨が多いと年輪の幅が広がる。木工は材料の木の乾燥過程が大切」という発言からは、木への愛情が発露していた。

彼ら作家たちの仕事を、町観光協会会長のI.Yは「地域に根差し熱心に創作に励み、採算を度外視しても地域イベントに協力」と高く評価している。作品は、町内に新設の「道の駅」にも卸されている。

工芸村の店周辺は、過疎地の奥地のため、人通りが極小でビジネスとしての立地条件は一見よくない。しかも、M夫妻は2人とも自然からの素朴な感性を大切にした作家であり、利潤の極大的な追求めざすタイプの資本主義の事業家とは求めるものが異なる。

彼は「自由に活動するため、町役場からの補助金交付は受けたくない」と語る。

彼の愛郷心は「下（しも）でのイベント開催では、上（かみ）へは人は来ず、上は空洞化するばかり」という言葉にうかがえる。下とは、徳島市に近い広野から神領地区までを意味し、上とは、町の奥地の下分と上分地区を指す。

工芸村は交通不便な上のエリアの地域振興と一体化した文化運動なのである。山村で創作に励む作家の作品が地元で展示され、住民に愛されてこそ、山村発の手作り工芸の地場産業の芽は育つのではないか。

VI. 地域高齢者福祉の現場に見る郷土愛

VI-1. 地域高齢者福祉事業の特徴

2001年3月時点の神山町の総人口は8387人で、うち65歳以上の高齢者は3207人、対総人口比は38%である。高齢者の1人暮らし世帯は402で、対総人口比は4.8%。また高齢者のみの2人世帯は910で、同10.9%である。

「老後は子どもの世話になりたい」という希望がかなえられなくなりつつあることは、都市部ほどではなくとも過疎山村でも明らかである。たとえ子どもと同居、もしくは近所に子どもの家族が居住していても、終日、老親の介護を行うことは一般に困難な中、高齢者福祉事業へのニーズが高まっている。

高齢者のみの世帯の総人口比が15.7%に達する中、町が注力の福祉事業の特徴を見よう。

- (1) 高齢者の温泉入浴サービス 町在住の65歳以上の住民に神山温泉保養センターの利用料金割引を実施。
- (2) 外出支援サービス 介護保険の非適用者で概ね65歳以上の住民に、自宅から町デイサービスセンターまでの送迎を実施。
- (3) ホームヘルプサービス 介護保険の非適用者が自宅での日常生活を円滑に営むため、軽度生活援助を実施。生活指導員の派遣などを行っている。
- (4) 家族介護教室 高齢者介護に携わる家族のため、相談・情報交換、介護技術習得の支援を行っている。
- (5) 高齢者の住宅改良・改造支援 暮らし易い住まいへの改良の助言と、住宅改造応援のため改造経費の3分の2助成を実施。

これらの施策からは、ノーマライゼーションの理念の実現、住み慣れた地域社会での生活の保障、在宅福祉と施設福祉サービスとをきめ細かく提供可能な地域福祉の体制づくりへの取組がうかがわれる。高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らすためには、家族の介護負担を軽減し、高齢者が出来る限り自立した生活が可能ないように支援することが求められている。以上の

事例からは、介護保険が適用されない高齢者に手厚い福祉支援を始めていること、郷里の温泉への高齢者の高いニーズに応え、地域資源の温泉を福祉事業に生かす取組が目される。

今後の課題としては、多様化する福祉ニーズ対応のため、福祉専門スタッフの人材確保と強化、ボランティア活動、NPOによる民間福祉活動の活性化である。

VI-2. 故郷の老人ホームへの高いニーズと課題

神山町内には、次の高齢者福祉施設が開設されている。町直営のホームも90年代に新築され、実質的には全施設が90年代にオープンしたのは、高齢者福祉への地域ニーズの高まりを物語っている。

設置主体が町の施設は、町老人ホーム（1971年開設。養護施設。定員50人、短期5人）、町デイサービスセンター（1998年開設）、町在宅介護支援センター（同）。

民間が設置主体の施設は、（福）有誠福祉会が経営する、特別養護老人ホーム神山すだち園（1993年開設。定員50人、短期10人）、同園デイサービスセンター（同年開設）、同園在宅介護支援センター（同）。

すだち園は花と緑に包まれ自然環境に恵まれている。特養ホームは満員状態で、デイサービスは20人が利用している。入所者の人格を尊重し個別ニーズ対応型の介護に努め、園庭での地域の方とのゲートボール大会などの交流、趣味活動を支援している。

また（医）中谷医院が医院に併設して経営の介護老人保健施設・かじかの郷（1998年開設。定員72人）があり、現在、64人が利用。デイケアサービスを140人が受けている。

町営老人ホームは1997年に新築移転された。常時、入所待機者が5人前後おり、ニーズは高い。「長年住み慣れた故郷のホームが一番安らげる」と、強い郷土愛が垣間見られる。山村地域で美しい自然と昔ながらの人情に恵まれ、とくに高齢世代の町民の結び付きは強い。町外で

暮らしした経験のないお年寄りには、やはり故郷が永久の地なのである。

町の老人ホームは、町の中央部の上角に立地、自然環境に恵まれている。12畳の部屋に間仕切り個室として使用し、夫婦で入居の場合は間仕切りを取り払い広いスペースで暮らせるように配慮されている。すぐ近くに町の第3セクターが経営の神山温泉があり、温泉好きのお年よりは毎日のように温泉を楽しむなど、入居者の自由な暮らしを縛らない方針が重視されている。ショートステイ（短期入所）も5室全室が個室である。

かじかの郷の介護施設では、介護保険制度下、要介護度1から5までのお年寄りがリハビリテーション・サービスを受けながら、家庭復帰をめざしている。要介護度3の利用者が最多で、女性が7割で、平均年齢では75-80歳の人が多い。70代半ばを過ぎると退所の可能性が低下し、全体でも退所できる人は10%以下である。所在地が町の中心部のため、デイサービス利用者で、上分、下分の奥地の住民は、施設のマイクロバスの送迎サービスも受けている。

課題は以上の全施設が、町の中心部および徳島市に近い地域に立地し、奥地には皆無であり、町内の地区間不均衡が見られることである。

Ⅶ. 地域との一体感重視の保育所運営

Ⅶ-1. 町内唯一の保育所の気概

子育て支援へのニーズが高い中、地域に根差し、ローカルティーを生かした保育所運営の在り方が、以下の事例から示唆的であろう。

神山町には4幼稚園と1保育所が開設されている。町内で唯一の保育所、下分保育所は1951年4月に開所、同年8月に児童福祉法による施設（定員80名）として認可された。87年に定員60名に変更、92年に新築移転。97年に上分保育所の休所に伴い上分地区からの入所を開始した。

98年、0歳児受入を始めた。母親から、「1年間の育児休業をとらないで、生後半年くらい

で働きに出たい」という要望が出たことが契機だった。2001年度は、年度途中で0歳児が1人入所を希望したが、「年度途中では保育士の増員が困難」のため入所できなかった。急には新任の保育士を探すことが困難だという。

町内で唯一の保育所のため、人数は少ないが、徳島市寄りの広野、阿野、神領地区からも子どもが通っている。奥地の上分地区などの場合、子どもは保護者の車によるか、あるいは町営バスで通っている。

農山村地域のため、祖父母との同居世帯、祖父母が近くに居住のケースもあるが、核家族が増え、都市部からのUターン家庭も少しずつ増えつつあり、保育所へのニーズは高い。

四季折々の自然に親しむ保育を重視するなど、独自の保育実践に気概が垣間みられる。保育士は「自然に囲まれた山村で暮らしていても、子どもたちはモータリゼーション時代で車での移動も多く、必ずしも自然をよく観察していない」と語る。このため、保護者付き添いのもと、夏季には、2、3歳児以上の子どもが近くの鮎食川で川遊びも楽しんでいる。

2001年8月現在、児童数は0、1歳児が7人、1、2歳児が10人、2、3歳児は24人、4歳児が13人、5歳児は16人で、定員の17%増の70人が通っている。保育所へのニーズの高さが明らかである。職員組織は、所長と、主任保育士1名、保育士7名、調理員2名、用務員1名で構成。保育時間は午前7時半から午後6時までで、短時間だが延長保育も実施している。

運営方針は次の通りである。

- (1) 子どもが遊びたくなる環境づくり
- (2) 幼児と共に自然や文化とのふれあいを楽しむ保育所
- (3) 1人1人がかけがえのない存在として大切にされる生活
- (4) 年齢やクラスにこだわらず自然に交流できる和やかな雰囲気づくり
- (5) 子の幸せを保護者や地域と一体となり考える保育所

Ⅶ－２．保育所と老人ホームの交流

保育環境は、鮎食川のせせらぎ、緑豊かな野に恵まれ、児童が野外で伸び伸びと遊ぶことができる。地域的個性を生かし、自然に親しみ、感動体験を大切に、豊かな感性育成を重視している

年間行事で、敬老会への出演、老人ホームと保育所の合同運動会、祖父母との遠足など、世代間交流に努めていることが評価される。

保育所の子どもたちは、遊戯を老人ホームで披露もしている。また保育所でついた餅を、幼児たちは老人ホームの入居者に届けている。

地域の運動会に向けて、幼児と保護者が踊りの練習を保育所で重ね、その際には、保育士が保護者にリズム感覚を磨く講習も実施している。保育所では「地域ぐるみの運動会に、幼児と保護者が共に参加することは、地域と一体の保育所づくりに重要」としている。

山村の自然に親しむことを大切に、春季の親子遠足、七夕祭りなど、地域に根差す保育所づくりを志向している。保護者会も、町球技大会参加、夏祭りバザー出店などの活動を重ねている。

Ⅶ－３．子育て支援への多様なニーズ

過疎山村の地域解体に歯止めをかける行政施策として、多様化する住民ニーズに応えた保育所、老人ホームなどの福祉施設、学校教育、医療機関の機能強化が問われている。

保育分野では全国的に、規制緩和から、民間企業や学校法人など経営主体も多様化しつつあり、民間との連携強化も課題である。

ただし多くの過疎自治体と同様、神山町の財政実態は厳しく、保育所の充実を一挙に進めることは困難で、短期目標、長期目標と一步一步、段階的な強化が期待される。

少子化による子どもの減少以上に、女性の社会参加が進み、保育ニーズが高まっている。保育所は地域に密着した児童福祉施設であり、子育ての知識とノウハウ、経験を蓄積しており、地域の子育て支援の中核機能を担うことが期待

されている。

下分保育所は地域に根差した運営に努めているが、多様化する子育て支援ニーズに応えた機能展開が課題だろう。町内唯一の保育所という特性はあるものの、今後、夜間保育を含む延長保育の充実、休日保育、また病後児保育、障害児への保育が重要である。

地域の子育て支援の一環として、保育所では、定型的で継続的な通常保育とは異なる一時保育の実施も課題である。

さらに児童福祉施設として、保育所には、乳幼児の保育に関する相談、助言機能の充実、地域子育て支援センター事業が期待される。

同所は現在は全職員が女性であるが、男性保育士の積極採用も課題である。

全国で約22000カ所の認可保育所の6割を公立が担っている。都市部などでは、公立の認可保育所も入所枠の拡大、延長保育、休日保育、病児保育など柔軟なサービス充実に努めつつある。しかし、多用な育児支援へのニーズの高まりの中、夜間・休日保育などに対応しているのは現状は民間の無認可保育所であり、認可保育所と無認可保育所の連携が問われている。

神山町でも、保護者の働き方が多様化する中、保護者が安心して働ける保育の受け皿強化が期待されよう。少子化時代の中、ニーズが高いのが保育分野である。

国の経済財政諮問会議は、健康・介護・保育サービスが需要拡大の成長分野で、新規雇用が見込めると提言している。経済産業省の「男女共同参画に関する研究会」は、保育所待機児童解消のため、今後10年間で入所児童数84万人増、保育所9700カ所増、保育士10万人増が必要としている。自治体による保育、健康、介護分野の施策強化は、福祉充実と共に地域の雇用対策にも通じている。

Ⅷ．心に残ったフィールドワークの記録

ラポール（調査に於る信頼関係）

内的フィールド・ノートは、インフォーマン

トとのラポールの形成の中から記録される。質問して聞きとりしたこととは別に、自然な会話のやりとりからインフォーマルにぽつりと一言話してくれたことが、重要な発見につながるケースは多く、次にその典型例を紹介しよう。

VIII-1. I.Yの自己形成

今調査で、これまで知らなかった彼の！側面にふれた。地域活性化運動に多年取り組み続ける中で、彼は都会からの人々を歓迎するためのノウハウを実践から体得していったことがうかがえよう。

彼はキャンプ場を訪ねる客に、様々な草花を紹介する際に、冗談を連発、客を楽しませようと努力している。客が「あの白い花は何ですか」と聞き、彼が「アオダマ、アホダマと違うんですよ」と答え、客は爆笑しながら「アホダマが咲いている」と連呼したりする。笑いのネタは思いついた時、ノートにメモしておくというから、落語家さながらの努力である。

植物の名を教える際にも、学術上の正式な名称と共に、彼が考えついた楽しい愛称を伝えて、客に夢を贈っている。例えば、リョーブは「森のジャスミン」、ユキモチソウは木陰にひっそりと咲くことから「木陰の夢花」といった具合にである。

キャンプ場を開設し、設備と景観の素晴らしさだけを売りとするのではなく、接客時の会話で客に最大限くつろいでもらう努力を重ねている。

VIII-2. 自然の中での生活で希望をはぐくむM夫妻

都会生活は、金銭を媒介に商品やサービスを得て営まれており、購買行動での選択の自由などの利点がある。近年は山村でもモータリゼーションなどの中、自給自足型生活は稀になっているが、都会に比べ山村生活の魅力を高める方策は自然の豊かさをいかに生かすかにかかっているように。

換言すれば、敗戦後の「向都離村」現象は、経済成長の中、自然よりも都市生活の便益を追

い求めた帰結に他ならない。

M夫妻の夫は、「人は希望ある限り若く、失望と共に老いる」を座右の銘にしてきた。

夫妻は、「植物園での汗しての作業と薬草が健康の秘訣」と語った。

夫妻の暮らし方は、自然を生かすための創意工夫に満ちていた。夫妻の自然観は、征服しコントロールする対象としての自然という認識ではなく、自然に生かされている人間存在という認識に傾いてきたと思われる。

植物園で採集したヨモギなど数種類の薬草を布袋に入れて、沸騰した湯で煮出した後に、五右門風呂の浴槽に入れて薬効を出した薬草風呂に入浴していた。

薬草の成分が溶け出た風呂への入浴は、健康に大きな効果があるという。風呂も燃料は便利なガスでなく、あえて手間のかかる、枝打ちした枝などを自分で燃やして沸かしている。

たまたま、今秋、農園で珍しいオレンジ色の巨大なカボチャが収穫され、夫妻は、ナタを金槌で叩いてカボチャを2つに割っていた。山村生活は、都会から見れば一見原始的な作業も必要だが、夫妻はそんな自然と共にの暮らしを愛している。

野山で採集した貴重な植物は、一度、植木鉢で根付かせてから植物園に移植するなど丹精込めた作業を重ねている。Mは「デリケートな野草が多く、ちょっと自然条件が変わっても育たない。しかし、元気に育ってくると、我が子を授かったときのように感動を覚える」と述べた。

IX. 現場の実践の学とフィールドワーク

本調査を踏まえ、生活者の「現場」の研究課題にふれよう。本稿では、町おこしの担い手の生き方、地域福祉の特質をフィールドノートから伝えたが、生活の「現場」は生活者にとり、地域経済、保育、老人福祉と区割りされているのではなく、これらが複合化・一体化された「生の小宇宙」と言えよう。神山町営老人ホー

ムが個室化され好評という第1報は、工芸村から入るなど、思いもかけない所から情報が伝わることもその証左だろう。

本稿は、神山町には8000人余の住民が暮らす中、限られた調査期間に、重要なインフォマントを訪ね、聞き取りから「小宇宙」の息吹を探り、地域の問題解決の手がかりを手探りで求めた報告である。

本研究は継続調査でもあり、調査に臨む前におおまかな現地踏査の日程の計画、聞き取りの依頼はしたが、「オープン・エンド」型の聞き取りの相手に自由に語って頂き、疑問点のみ質問する手法を一貫させた。

質問項目を用意し順番に聞くアンケート調査は、回答者を一定数以上得ての数量的調査には重要だが、エンカウンター（出会い）を何より重視し、本音に迫りたい質的調査の場合、本筋ではない。

数量的アンケート調査では、調査する側（アンケート実施者）とされる側は二項分離型となる。調査される側が「この質問はおかしい」と思っても、アンケートの標本が多い場合、質問内容の修正は困難である。

質的な聞き取りでは、調査者の質問内容に対して、疑義、異論が出ることはざらであり、ラポール（信頼関係）が深まると、調査への協力という関係を越えて、「人間と人間の生の希望をめぐる関わり」が顕在化してくる。本報告は、I.Y, M 夫妻からの聞き取りを最大限に生かし、筆者の問題意識のもとルポルタージュしたものとと言える。

現場の学の実践手法としてのフィールドワークは、(1)人々の意識次元での生活世界、(2)労働、家計、衣食住、育児、介護などの生活世界といかなる往来関係にあるべきなのか。(1)は、現象学的社会学が主題化させた、人々の意識の中で構成される「個々人の志向性、社会の自明性を問う」問題に深く関わり、(2)は、経済や福祉の社会問題の発見—地域での「資源」の生産、獲得と分配問題、自己決定権などに配慮した福祉施策の在り方に関連している。(1)は、

職業や学び、医療・福祉、地域活性化において個々人が何を希望し求めており、いかなる社会条件が壁(阻害要因)であり、促進要因であるかを解明する作業である。(2)は個々人の生活自立に関わる問題である。

(1)は、理論面では現象学的社会学、象徴的相互作用論など、調査方法論としては、個人生活史 (personal life-history)) 研究などが有効と思われる。20数年前、キャンプ場開設をたった1人で志向した時、I.Yはドン・キ・ホーテ視された。彼の志しは、山村社会の自明な「ごく当然の常識、通念」(現象学で言う of course assumption) に背反していたのである。だが、地域活性化運動の足をすくう、いわば自明性の背後の闇の世界（一見当然視されることが実は堂々巡りに陥る罠となり先に進めなくなる）を、彼は20代で察知し、徒手空拳の挑戦を進めたのである。

X. おわりに—フィールドワークと社会学教育の可能性

調査研究を踏まえ、フィールドワークと社会学教育の可能性にふれたい。

筆者は教室で、フィールドワークの目的と実際の進め方と楽しさを伝えと共に、学生に、家族、地域や福祉施設、各種集団でのフィールドワーク体験を勧め、そのレポート発表会を計画、試行している。神山町調査で出会った方々の生き方に関しても、授業で学生に伝え応答を交わした。東京に代表される巨大都市や大きな組織の全体像調査となると、多人数での共同研究が必須条件となるが、神山町のような相対的に限られた地域は少数の調査者でのフィールドワークに適している。

教室の外で実施したフィールドワークの成果を互いに持ち帰って報告、議論を交わすことは、学生、教員双方にとり、現実の実社会の多様な生活者に学び新しい風にふれることであると思う。学生と教員の対話型、双方向型の授業実践に、フィールドワークを組み込むことは有効で

ある。

学生がフィールドワークを実施して成果を上げるための課題は次の諸点である。

(1)当然のこととして教室外の作業となり、限られた時間の効率的な有効活用策の検討。事前調査から本調査までの調査計画策定。

(2)調査目的の検討と対象地域、インフォーマントの絞り込み。

(3)問題意識を調査の中で鮮明化させ、仮説形成から検証に至る実証的科学的アプローチ、調査手法の選択と、複数の手法の複合的な組み合わせ方を実地に学ぶ。

(4)経験的データを活用しての調査報告レポートの書き方と口頭発表、ディスカッションの進め方の習熟。

(1)と(2)に関しては、暮らしの身近な場の生活問題に着眼することが現実的である。計画通りに調査が進まないのもフィールドワークの特質であり、(2)(3)では偶然の出会いから重要な情報が得られることも多い。インフォーマントとの出会いと交流に関する人間臭いエピソードも、相互作用としてのフィールドワークでは看過できない。

調査で、当初の仮説や思いとは違う結果に至れば、仮説の修正作業が大切になる。検証では最大限、データ収集と分析による裏付け作業が大切である。(4)は、一番強調したい点、訴えたいこと、調査で解明できた点と未解明点を明らかにすることが大切であろう。

参与観察での生活体験の共有、インフォーマントからの聞き取りと応答を主な手法とするフィールドワークは、生活現場でのミクロな問題発見に最適な手法である。ある個人の生活史、1家族、1集落、1つの小規模な企業と時代変化の関連などの究明である。

しかし、フィールドワークは、特定の出会い

の「1回性」という実存的特性から、マニュアル化は困難を極め、「日本では、フィールドワークはロスト・アートどころか、技として確立されたことさえなかった」(佐藤 [1992]) のである。しかしフィールドワークは門外不出の秘技、名人芸ではなく、すべての人々に開かれた生活の学であり、その手法を伝達していく必要性は高い。生活者の泣き笑いの日々の暮らしの現場に身を寄せ、それまで未見だった生活世界について学ばせて頂くのがフィールドワークなのではないか。

フィールドワーク (fieldwork) の日本語訳を調べると、実地調査のほか、「野良仕事、野外作業、さらには戦場で土のうなどを築く」といった土くさい作業の意味が列挙されている。キーとなる field は、「野原、野に育つ、野生、現場で働く、出先」という意味であることを確認しておきたい (『新編英和活用大辞典』[1995])。

フィールドワークの手法の中でもっともポピュラーなものは、調査者が調査対象者の暮らす生活現場に入り、生活体験を共にしながら問題意識の深まりをめざす参与観察法である。科学としての調査は究極、徹底した仮説検証が不可欠だが、教育実践としては第1に野外調査に親しみ、現実視野を開くことではないか。社会福祉学を学ぶ学生は施設実習の機会に児童、高齢者、障害者の方々と生活体験を共にしており、住居学科の学生は建築物、まちづくりの見学を重ねる。これらの校外実習や見学は、フィールドワーク体験と重なっている。授業を通じて参与観察のトレーニングを図り、現場の体験から多様な問題点の発見能力の育成を図りたい。若者たちが現代社会の諸問題に親しみ問題意識を培い、社会への視野を開くためのフィールドワークの応用可能性について試行を深めたい。

注

- (1) 20世紀初めに米国のシカゴ学派が参与観察手法を発展させ、アンダーソンが『ホボ』(1923)、ホワイトは『ストリート・コーナー・ソサエティ』(1943)などの名著を著した。
- (2) シカゴ学派の中核、R.E.パークは教え子に「自分の目で観察すること」を勧め、「諸君、街に出て、諸君

のズボンの尻を本物の調査で汚してみなさい」と訴えた。多様な生活の現場に身を寄せ生活者から学びとることを重視したのである。

- (3) 広井良典は、社会保障、環境の問題群と経済システムとを統合した新たな認識枠組を、定常型社会論で提起している。

文献

- 阿部富士男 1983 『遊びと労働を生かす保育』 国土社
 阿部謹也 2001 『学問と世間』 岩波書店
 有賀喜左衛門 1976 『一つの日本文化論』 未来社
 青井和夫 1999 『長寿社会を生きる 世代間交流の創造』 有斐閣
 青木宏一郎 1996 『森に蘇る日本文化』 三一書房
 安積純子ほか 1995 『生の技法』 藤原書店
 浅野仁 1992 『高齢者福祉の実証的研究』 川島書店
 Becker, H. 1986 Writing for Social Scientists Chicago, U. of Chicago P.
 Bulmer, M. 1984 The Chicago School of Sociology, U. of Chicago P.
 Denzin, N. 1978 The Research Act, McGraw-Hill.
 同朋大学老人問題研究会編 1992 『長寿社会における老人福祉』 中央法規出版
 Hammersley, M. 1989 The Dilemma of Qualitative Sociology, Routledge.
 橋本正明 1983 『輝け老人ホーム』 ミネルヴァ書房
 畠中宗一 2000 『子ども家族支援の社会学』 世界思想社
 平野秀樹 1996 『森林理想郷を求めて』 中央公論社
 広井良典 2001 『定常型社会』 岩波書店
 本多勝一 1983 『ルポルタージュの方法』 朝日新聞社
 福田アジオほか編 1996 『日本民俗学概論』 吉川弘文堂
 福岡安則 2000 『聞き取りの技法』 創文社
 福武直 1977 『戦後日本の農村調査』 東大出版会
 市川健夫 1985 『フィールドワーク入門』 古今書院
 稲葉一洋 2000 『地域福祉の視点』 高文堂出版社
 伊東真理子 1995 『楽しく学ぶ高齢者福祉』 ミネルヴァ書房
 泉順編著 2000 『介護実習への挑戦』 ミネルヴァ書房
 垣内国光編 1998 『児童福祉法改正と公立保育所の役割』 ひとなる書房
 神山町年表編集委員会編 1971 『神山町年表』 同町
 神山町編 1990 『過疎地域活性化計画 参考資料』 同町
 神山町編 1994 『神山町高齢者保健福祉計画』 同町
 神山町編 1998 『人も自然もあたたかい 徳島神山』 同町
 金田利子ほか編著 2000 『保育の質の探究』 ミネルヴァ書房
 金子勇 1997 『地域福祉社会学』 ミネルヴァ書房
 川喜田二郎 1973 『野外科学の方法』 中央公論社
 川村匡由 1996 『新しい高齢者福祉』 ミネルヴァ書房
 柏女霊峰 1999 『児童福祉の近未来』 ミネルヴァ書房
 喜多野清一 1976 『家と同族の基礎理論』 未来社

- 町村敬志 2001 「行きずりのフィールドワーカー」『一橋論叢』125 巻 4 号 一橋大学
- Mills, C.W. 1959 The Sociological Imagination, Oxford U. P.
- 三浦文夫 1987 『社会福祉政策研究』 全国社会福祉協議会
- 水野節夫 2000 『事例分析への挑戦』 東信堂
- 杜性次ほか編 1981 『移り行く山村 上分上山の山河』 上分農業協同組合
- 村山祐一 1993 『保育園はどう変わるべきか』 ひとなる書房
- 仲村優一編 1989 『福祉サービスの理論と体系』 誠信書房
- 中野卓 1977 『口述の生活史』 お茶の水書房
- Sanjek, R(ed.) 1990 Fieldnotes, Cornell U. P.
- 山村経済研究所編 1994 『山村が壊れるその前に』 日本経済評論社
- 山村振興調査会編 1967 『日本の山村問題』
- 佐藤郁哉 1992 『フィールドワーク』 新曜社
- 沢田清方 1998 『住民と地域福祉運動』 ミネルヴァ書房
- 鈴木広編著 1987 『現代社会を解説する』 ミネルヴァ書房
- 庄司洋子ほか編 1998 『家族・児童福祉』 有斐閣
- 庄司洋子ほか編 1999 『福祉社会事典』 弘文堂
- 高橋重宏編 1998 『子ども家庭福祉論』 放送大学教育振興会
- 立岩真也 2000 『弱くある自由へ』 青土社
- 内海洋一編 1992 『高齢者社会政策』 ミネルヴァ書房
- 内山節編著 2001 『森の日本列島に暮らす』 コモンズ
- 鷲田清一 1999 『聴くことの力ー臨床哲学試論』 TBS ブリタニカ
- 渡辺牧 1989 「地域おこしと地域情報ー徳島県神山町の調査研究」『共栄学園短期大学研究紀要』第5号
- 渡辺牧 1992 「個人生活史に見る草の根からの村おこしー徳島県神山町の調査研究」『共栄学園短期大学研究紀要』第8号
- 山田勇 1996 『フィールドワーク最前線』 弘文堂
- 山本主税監修 1997 『地域福祉・介護サービスQ & A』 中央法規出版
- 幼児保育研究会編 1999 『最新保育資料集 1999』 ミネルヴァ書房

——文献挙示は＜ソシオロギス方式＞に依る——